

谷口さんを憶う

米田正文*

谷口さんが今年5月、脳血栓で入院されたときはびっくりした。何しろいつも壯者をしのぐ元気であり、昨年学術会議派遣の訪中水利科学代表団の団長として、中共地域を歩かれたときにも先頭に立つて視察せられ、酒量も一行中随一であつたとのこと。入院後病状は悪化を伝えられ、私共が御見舞に出掛けても面会のできなかつたほどだが、もともと頑健だつたせいで病勢一進一退を続けられ、終りの頃は回復の一縷の望みさえ出て、関係者をほつとさせたが、遂に入院生活100日の8月13日、東大病院沖中内科で永眠せられたことは、私共親しく御指導を受けた者のみならず、土木関係者の痛恨措く能わざるところであつた。

谷口さんは明治42年に東大土木を出られて、ただちに北海道庁に入られ、小樽や留萌の港湾工事に従事し、数年して土木局に入られてから、大正7年に淀川増補工事に従事せられた。このときが谷口さんの最も勉強されたときであつて、朝早くから役所に出掛けて自分で測量機をかついで測量もしたし、自ら筆をとつて工事の設計もし工事の監督もせられた、その真剣な態度には驚嘆したと言われている。家庭的には子供運に恵まれなかつたので、仕事そのものが子供であつたようである。当時苦心された、宇治川、木津川、桂川の三川合流点付近の工事は同郷の先輩南画伯の手による名画があり、終生これを壁間に掲げて当時をしのび、かつは後輩指導のテキストにもせられたようである。この画は近く近畿地方建設局に遺族から寄贈されることになっている。

昭和9年には土木局第一技術課長となり、ついで東京土木出張所長を経て昭和14年には内務技監に就任された。当時満洲支那方面の大陸関係の事務が多く、技術者を派遣する等で苦勞されたものである。昭和16年には土木学会会長をせられ昭和17年に退官せられたが、その年黄河水利委員会顧問、華北政務委員会建設総署技術顧問となり大陸で活躍せられた。多年にわたる専門的知識と、完成された円満な人格とは、国民政府の信頼の中心となり、昭和23年帰還されるまで山西省太原にとどまり、専心土木技術のために精進せられたことは周知のとおりで、著書「大陸の曲線」に詳述されている。

谷口さんは決して怒らない人であつた。どんなヘマを部下がやつても決して怒らず、淳々として理を説くという人柄であつた、いわゆる温容そのものであつた。そのため部下としては自分のやつたことが良いか悪いかかわからずに困ることもあつたと言う人もあるが、この温容こそ晩年大陸で国民政府の要人と接触したとき、現地人の尊敬を一身に集めた所以である。そして事業に対しては徹頭徹尾、真剣な取組みをやり詳細をきわめた。一昨年

佐賀県の六角川改修の調査を依頼されて現地に行つたときも、河川の上流から下流まで綿密な踏査を行つて細かに意見を述べられた。谷口さんの手掛けた河川改修計画は数多くあるが、その特徴はきわめて現実的で、無理のないということを根本理念にしておられたようである。

人柄を表わしているというべきであつて終始一貫変りがなかつた。

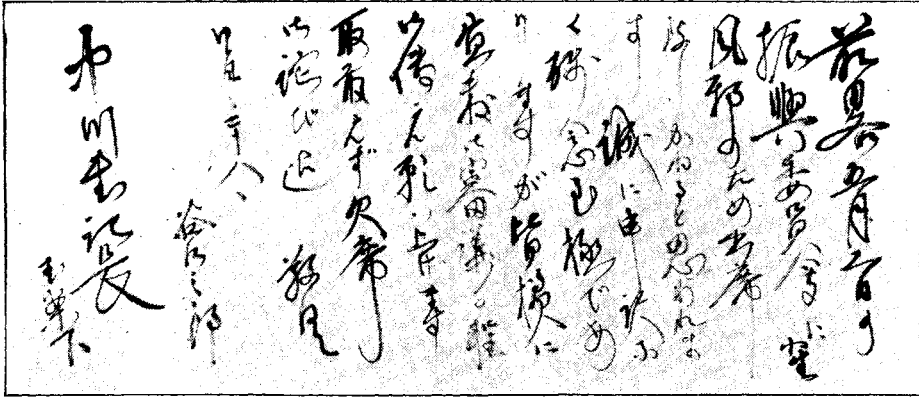
家庭的には必ずしも幸福といえなかつたことは、お子さんのなかつたことと、夫人に十数年前死別されたことである。特にお子さんのなかつたため、夫人の死には非常なショックを受けられ、孤独を慰めるために南画伯の手による夫人の肖像画をかけて、これに對座して独り酒を酌んで、在りし日と同じであつたという純情さには、聞くものをして泣かしむるものがあつた。

谷口さんの酒好きは有名であつて、興至れば夜の更けることを知らなかつた。明治42年組は酒が強いといわれ、現在なお達者でおられる牧野雅楽之丞さん、すでに亡くなられた山内喜之助さん等は同僚で、いずれも酒豪の組に入る人々である。酒がまわると日頃あまり言葉の多くない谷口さんもシャレも飛ばすし、若かりし頃のことを淡々として話し出すあたり、われわれには本当の親爺のような感を抱かせたものである。

平生自分は血圧の心配はないから酒は相当飲んでもよいのだと言われておつたし、タバコも吸つておられたほど健康には十分な自信を持つておられたので発病以来、重病にもかかわらず、相当長い時日をたえ抜かれたことと思う。

日本の土木は明治以来、河川改修を中心として発展してきて今日の段階にまで進歩したものであるが、この日本土木発達史の中においても、明治から大正にかけての河川改修が中核となつてきたもので、この事業を推進された先輩はたくさんあるが、第一期ともいべき明治時代は外国土木工学を日本に輸入する時代であつたといえるし、大正時代になると、これが日本的に咀嚼されて日本の土木の基礎を作つた時代だと思ふが、この時代の重要な役割を谷口さんは果たしたのである。今日われわれに常識化されていることすらも、当時はいろいろと研究検討を積んだ時代であり、これらの人々があつたからこそ、今日の発達が期せられたといえると思う。その重要な仕事を担当された谷口さんの逝去は、われわれにとつて非常な損失であり惜しみても余りあることであるが、またこれらの偉業を完成せられ、多くの後輩を育て上げられ、今日の日本の土木を実現せられたことは、時と人との見事な調和の上に立つて始めてできることであつて、谷口さんの霊ももつて眠すべきだと思ふ。地下の靈安らかに眠られんことを衷心お祈りする次第である。

* 正員 工博 土木学会副会長 建設技監



谷口三郎先生の思い出

田淵寿郎*

思い出せば谷口さんと私との間は古いもので、大学実習で北海道に行つたとき、札幌の土木出張所長をしておられたのが、大正2年の夏であるから45年にもなる。学校を卒業したときは不景気で就職口がなく、故近藤先生から災害で1年だが山形県庁へ行つたらどうかとすすめられ、1年ですぐやめるのは嫌だといつたら、わがままいわずに行けといつて下さつたのが谷口さんで、その言葉に従い山形入りをした。2年あまりして京都府に行つたらといわれ、大正6年の秋京都府技師になつて淀川大洪水の後始末をすることになった。そのとき谷口さんも大洪水の後始末をするため、翌7年故坂本博士を主任としてその次席になつて、淀川増補改修に関係せられるようになった。これが谷口さんの淀川に関係せられた始まりで、以来坂本さんを助けて淀川改修に心血を注がれた。13年に坂本さんが神戸の所長になられたので主任として活動せられ、あの難物の三川分流や伏見の閘門にはよくよく苦勞されて思い出が深かつたとみえ、南 薫造画伯を煩わしてこの二つを画化して喜んでおられた。今日谷口家を訪ねて仏前に御冥福を祈ると、直前にこの三川分流の絵が置いてあつた。南さんはなかなか念入りで、絵はどこに掛けるつもりかとワザワザ谷口家を訪ね応接間を詳細に見て、ヨシとばかりに京都に行つて画かれたとのことで、焼けて今はなき応接間にピタリとあつた名画である。その絵がいま仏前にある。谷口さんの写真はこれを見てニコニコしているように思われた。ちょうど欄間の上には亡き夫人の油絵がかかっている。夫人もよほどこの絵が気に入つたとみえ、行くたびに賞めないと機嫌が悪いくらいだつた。その夫人と谷口さんがジツトこの絵を見ておられるようで、心あつてこの絵との関係を知つて出されていたかどうか知らぬが、当時を知る私にはこの場面を見ては泣けてしかたがなかつた。谷口さんは約10年淀川を手掛けられ、淀川に関係していま生きている人では大先輩の真田博士と私くらいではあるまい

* 正員 名古屋市役所助役

か。真田さんが所長の頃に夏休旅行で熊野路へ行つた。谷口さんは団長格で何かとやんちゃ技師の多い大阪出張所のことなので団長も骨が折れる。大阪から船で田辺に行つた。夜岸壁で長時間碇泊とのことに所長は寝てるので、この間にちよつと一杯という気で団長気を利かせて上陸、そこの居酒屋で一同よい気持になつて船に帰つてきて乗船というとき、上を見ると所長は上からわれわれを見てニヤニヤしているではないか。谷口団長、所長は寝ているのでこの間に命の洗濯と思つたのが意外上から見下されて口アングリ、ダーとばかりあの禿頭をかいおられたのに一同大笑い、こんな茶目気もあつた。

大阪出張所から昭和2年に東京に来られ、技術課で監督行政をやられたが、まことに親切でその指導ぶりは誰もが感謝したところで、いつも面倒なことは進んで引受けられるといつた工合であつた。ただ親切だけでなく現場で鍛えた技術が物をいつて、すべてがその急所に当るので絶対の信頼を受けておられた。民間に対しても一通りの見識を持つておられ、私が京都府技師として当時大問題であつた宇治川堰堤にぶつかつたとき何かと指導して下さり、さしもの難問題も解決、当時日本一の大堰堤ができたのである。また民間紡績業界の要望でブラジルのアマゾン流域を調査せられたことがあるが、なかなかその報告はしつかりしたものであつた。その帰りにエジプトのカイロで港湾会議があり、その副議長もつとめられた。

私として思い出の深いのは、内務省を辞めたのも同時で、17年私は中華民国建設総署技監として赴任したが、中国では仕事も多い面倒な技術面もあるので特にお願いして顧問として迎え、私の至らぬところを助けて頂いた。中国ではクコ先生と呼ばれて中国大官はいうにおよばず、当時の軍司令部や大使館でも評判がよく、おかげで私まで鼻高々であつた。当時黄河の三门峡にダムを作るについて現場を視察したり（学会誌 42巻8号口絵写真参照：編集部）、山西省治水を計画したり、また永定

河上流に官庁堰堤の計画を立てた。ついにその一つも実現はしなかつたが、官庁堰堤のごとき担任者まで決定、実施に今一步というところまで行つて日本の都合で中止になつてしまつた。このごろ聞けば中共政府でこの仕事を完成したとのこと、このダムの完成は永定河の治水に絶大の効果があるもので、天津地方の水害もこれで行くほどの工事で、われわれの手で完成できなかつたことは本当に残念である。

戦争はますます苛烈となり、われわれの仕事もさらに気ぜわしい状態となり、黄河からかんがい用水を大運河に送り、農地改良に役立たせる仕事もようやくできたので辞めて帰ることになつた。このとき谷口さんに「先に帰つて下さい、私は後から帰るから……」という、なかなか聞き入れない。「お前は身分がむづかしいから先に帰れ、私は身軽だからいつでも帰れる。先に帰れ」といつて聞かれず、心を後に引かれながら 20 年 5 月私は帰国したが、そのため先生はついに終戦を中国で迎えら

れ、捕われの身となつた。しかし平素クコ先生の評判は中国人の中でもよく知られていたので特に閻錫山氏に迎えられ、山西省の治水を進言せられ、閻氏の信頼を受けて無事に帰られた。日本学術会議で中国の要請による技術者派遣が問題になつたとき、私は谷口さんの派遣を進言してついに行かれることになつた。責任感の強い谷口さんはこのたびの中国行においてその活動は目ざましかつた様子で、帰られるとその報告書作製には全力をつくされ、ついに立つ能わざるに至つたのである。何となく私がこの立派な老技術者を死に至らしめたような気がしてならない。満腔よりお詫び申上げる。しかし私としては、この立派な死は後輩を奮起せしめ、技術者の尊さがどれほどであるかを示されたような気がする。この上はこの立派な老技術者を手本として、ますます日本技術者の技術向上に役立たせて御冥福を祈ることが、故人へのお詫びであると思いつ筆をおく。

故 前 副 会 長 佐 土 原 勲 君 略 歴



佐土原 勲君は 明治 20 年 11 月 20 日鹿兒島市に生れ、大正 2 年東京帝国大学工学部土木工学科を卒業後、ただちに鉄道に入り、北海道鉄道管理局を経て、本省監督局技術課に勤務、同 13 年 5 月から約 2 カ年間 欧米各国へ研究員として出張され、帰朝後昭和 6 年工務局に転じ、その後名古屋鉄道局工務課長、本省監督局技術課長を経て、広島鉄道局長の栄職につかれた。昭和 16 年退官されてからは軌道統制会長に就任されたが、昭和 28 年 9 月株式会社鉄工社を創立して、コンクリート防水工事に専念し、同社を今日あらしめた。

土木学会では、昭和 19、20 両年度副会長として学会の運営に尽力せられ、その後も折にふれ学会を訪れて、その発展状況を喜ばれた。昨年 7 月より健康を害され病床に親しまれていた

が、ついに昭和 32 年 8 月 25 日永眠せられた。

本学会は君の葬儀にあたり霊前に香華を供えたが、ここに重ねて哀悼の意を表する。

佐 土 原 勲 君 の こ と

安 東 功*

われわれのクラス（東大・大正 2 年）には、自称、他称の碁打ちが多い。棋院からの有段者だけでも大島満一（4 段）、中村孫一（初段）、田中 豊（初段）等々で、佐土原君は段こそ持たないが、その中間に位したのではあるまいか。

碁打ちはよく自分を高く評価しがちだが、彼はそうでない。私が先でも二目、三目置いても決して文句を言わず、黙々として最後まで打つてくれる。しかも先方のミスを期待するようなこともなく、といつて闘志はまこと

にさかんで、実に気持のよい人格的な棋法であつた。世の中はジャッジメントの連続といわれるが、むづかしい監督局時代にも碁と同じ、人格を発揮してよい判断の連続であつたらうと想像する。

氏は寡言の人であつたが聞けばまた何でも知つていた。ただ行動に表わさないだけである。酒も強く、クラスで一、二番といつたところだろう。出棺に際してメーソンリー白黒の若干もお棺に納めていただいた。冥福を祈るとともに、天上から宇宙線として囲碁の妙諦を下し賜わらんことを願う。

* 正員 攻玉社短期大学教授、中央大学講師